



特集

英語を学んで
見える未来。

英語を学んで 見える未来。

履正社には、専門的な学びに「英語」をプラスできる環境がある。
学生たちは英語力を高めながら、どんな将来像を描いているのか。
海外で研鑽を積む卒業生の声も参考に、彼らの未来をイメージしてみた。



photographs by Naohiro Kurashina



(写真右)国際医療専攻、国際スポーツ専攻の学生が集合。木曜担当のジャレット先生と(上・中)授業中の一コマ。少人数だからこそ会話量も多い(下)卒業生の佐伯絵美さん。カナダのチームで競技力を磨いている。ブリティッシュコロンビア州の代表に選出され、全国大会にも出場

履正社国際医療スポーツ専門学校では医療、競技スポーツ、トレーナーのすべての学科で「英語」をプラスして学ぶことができる。本校独自のカリキュラム「国際医療専攻」「国際スポーツ専攻」はその例だ。専門分野を習得しながら、基礎英語、TOEIC対策、英会話といった英語力を磨く学生たちは、どんな日々を過ごしているのだろうか。

「How are you today?」授業開始と同時に、スポーツ外国語学科教員、ジャレット・ペイリーが口火を切る。木曜日は日本語「切なしのフリーカンパセーション」学生が一番苦戦する時間だという。理学療法学科夜間部2年 齋藤蒼梧さんに話を聞いてみた。

「入学当初は先生の話の2/3程度しか理解できなかった。でも、今年になってリスニング力が上がったと思います。わかりやすく話すことも求められるので、言いたいことが上手く伝わったときはすごくうれしい。3月に初めて受けたTOEICも思った以上に点数が良く、モチベーションが上がりました。今は履歴書に書ける600点を目指しています」

理学療法と英語を学ぶため、本校を選んだ齋藤さん。「英語が話せると、いろんな患者さんを担当できる。同級生がアスレティックトレーナー資格取得とのダブル・ラーニングを頑張っているみたいに、自分は英語を武器にできる理学療法士になりたいです」

より現場で必要とされる人材に。

国際スポーツ専攻で、サッカーコース1年の降幡昌純さんは、海外でサッカーを指導するのが夢だ。

「日本の指導資格も取得しますが、イギリスのFACOTTライセンスといった海外の資格も持っていれば、より現場で必要とされる人材になれる。そのためにも英語が必要。できれば在学中に留学して、サッカーの本場、イギリスやドイツで刺激を受けたいです」

同じく国際スポーツ専攻、ライフ・フィットネストレーナーコース1年の黒崎葉さんは英語が話せるフィットネストレーナーを目指す。

「アメリカやオーストラリアが本場のMOSSAというフィットネスプログラムがあり、それを英語でも教えられるインストラクターになるのが目標です」

専門分野と英語を両立させた先には、どんな未来が見えるのか。在校生の少し前を歩む人がある。スポーツ外国語学科卒業生の佐伯絵美さんだ。在学中は本校の女子野球チーム「履正社RECTOVENUS」でも活躍。卒業式を待たずにカナダへ留学した。語学学校を経て、ホテルやレストランサービスを学ぶ現地の専門学校へ。野球も続けたことで、周囲とのコミュニケーションはより活発になり、関係も深まったという。

「カナダと日本をつなぐ架け橋に」

「最近、チームで話し合う機会があったんです。今シーズン、あまり勝てていなくて、『正直どう？ 野球楽しんでる？』『チームがひとつになっていないよね』って。日本でも触れにくい、デリケートな話題で意見を交わさせていたことに後で気づきました。野球のおかげで英語も人間的にもレベルアップできた1年半でした」

佐伯さんにも叶えたい目標、夢がある。

「来年、カナダで女子野球の世界大会があります。普段一緒に練習したり(女子野球の)普及活動をしている仲間がカナダ代表にたくさんいるので、『彼女たちと対戦したい』という新たな目標ができました。そのために、8月に帰国して日本代表入りを目指します。将来的には、カナダと日本の女子野球をつなぐ架け橋になれば。カナダに恩返ししたいんです」

英語は自身の可能性を広げるための道具のひとつ。学びの先には未知の出会いや体験があるだけでなく、新たな夢を描き、行動する力が身につくのだろう。